

特集・学園めぐり □ 愛知学院大学

仏教よりみた日中文化交流

愛知学院大学 教授
中国社会科学院文献情報センター名誉教授

鎌田茂雄

日中仏教交流の歩み

日本と中国は地理的に一衣帯水の関係にある。そのため、日本と中国との文化交流は古代から現代に至るまで連続と継続している。

奈良・平安時代には多くの留学僧が中国に渡り、唐の仏教学を学び、新しく翻訳された経典を日本に伝えた。玄昉、道昭、智通、智達たちは法相宗を日本に伝えたが、とくに玄昉は在唐十九年にも及び、長安や洛陽で修得した唐の仏教文化を日本にもたらしたのである。

平安時代の始めには最澄、空海が入唐し、最澄は天台宗を日本に伝えて比叡山延暦寺を開いた。空海は、長安で恵果より真言密教の真髓を伝受されて、帰国すると東寺や高野山を開き、日本真言宗の開祖となった。さらに円仁、円珍、真如親王、靈仙、慧萼らが入唐した。そのうちの靈仙は日本人として初めての三藏法師となった英才であったが、五台山靈境寺で毒殺されてしまった。慧萼は舟山列島の観音靈場である普陀山を開いた僧である。

中国僧の来日もあった。鑑真は何度かの渡航

に失敗し、遂に失明しながらも来朝し、唐招提寺を開き、日本律宗の基礎を確立した。

鎌倉時代になると、多くの日本僧が留学して日本に禅宗を伝えた。栄西は臨済宗を、道元は曹洞宗を開いた。また中国僧である蘭溪道隆、無学祖元などが来朝し、宋代の禅を日本に伝え、鎌倉五山、京都五山などが生れたのである。このような古代においては大きな日中仏教交流が盛んに行われたのである。

引きつづき、元、明、清代にも多くの日本僧が中国に留学して中国の仏教を学び、日本に伝えていく。水野梅暁師は道元の師である天童如浄の墓塔を拝し、天童寺住持敬安と互に仏教興隆について論じ、日中仏教徒の提携の大切さを知り、意気投合したという。敬安のすすめによって梅暁は、翌年明治三十六年、湖南省長沙に湖南僧学堂という塾を開いて、中国僧の教育に貢献した。

その後梅暁は、中国僧、笠雲等三名を日本仏教視察のため来日させて、日中仏教の友好と交流に尽した。湖南省の南岳衡山に南台寺という古刹がある。文革で荒廃したが、今は立派な寺院として復興しているが、この南台寺に彼が、黄檗版の大藏経を寄贈したことは、日中文化交流の上に残した大きな功績であるといわなければならない。

学者の常盤大定博士は、中国全土の石窟や寺院を調査し、中国の仏教文物に関する大著『中国文化史蹟』（十五冊、法蔵館）を刊行され、中国仏教研究史上、不滅の金字塔を樹立された。それはどこまでも中国の仏教を愛し、中国仏教の文化遺産を後世に伝えるためであった。

敗戦後においても日中友好仏教協会が設立されて、中国仏教協会と密接な交流を行い、また、日本の各宗派独自の祖山参拝訪中団が山西省の玄中寺、長安の青竜寺、香積寺、浙江省の国清

寺、天童寺などを訪れ、寺塔の復興にも協力している。

日中仏教学術交流

私事にわたり甚だ恐縮だが、この度、はからずも中国社会科学学院より外国人として初めて、文献情報センターの名誉教授の称号を授与された。このことについて報道した『中外日報』紙（平成七年十一月二日号）の記事を引用して授与式の模様を紹介させて頂きたいと思う。

授与式には汝信副院長、センターの李恵国主任、黄長著副主任をはじめ学術会議に参加した中国の著名な学者や社会科学学院の研究者、職員ら多数が参加。また本間社長以下、中外日報社一行も全員参加した。汝信副院長は国際交流基金による企業シンポジウムへの参加予定を変更してまで出席し、この授与式をいかに重視しているかを窺わ

せた。

初めに挨拶した汝信副院長は「朋有り遠方より来る、また樂しからずや」という孔子の名言を引用し、日本の友人・鎌田教授授与の式典に臨む喜びを表明した。さらに「鎌田先生は日本の著名な仏教学の専門家であり、六十年を一日のごとく仏教学を研究されてきた」と紹介。その著書は身の丈にも達すると述べ、「先生の態度は我々学問研究者の見習うべき態度である」と敬意の念を表した。また「鎌田教授は中国学術会の古い友人であり、毎年、中国を訪問して中国のほとんど全土に足跡を残されている」として、中日の仏教学研究と相互交流に対する貢献を高く評価した。

「そればかりでなく、将来は自らの蔵書を中国社会科学学院の図書館に寄贈することを考えていると聞き、そのことに中国の学

者は驚き感動している」と述べ、「鎌田先生はセンターが外国人に授与する最初の名誉教授である」として心から祝意を表し、鎌田教授の長寿と健康と新たな研究成果を祈って感謝の言葉とした。

李恵国主任は「鎌田先生は東京大学の名誉教授で、六十年の研究生活の中で大量の研究成果を発表されている。学士院賞や仏教伝道文化賞も受賞している著名な仏教学者である」と業績の一端を紹介。センターが海外の研究機関と交流を図り、援助を受けていることを報告し、鎌田教授を「名誉教授第一号」の学者として迎えたことを光栄として、センターの図書管理と研究に対する指導を願った。

この後、世界宗教研究所の呉雲貴所長が挨拶し、「本間社長と同様、鎌田先生は我々の古い友人だ。互いに温かい友情を通わせ、

心と心で結ばれた緊密な関係にある。学术交流でこれほどの関係をもつことは少なく、この関係はもっと大切にしなければならぬ。先生は徳望の高い仏教研究者であり、その厳密な学問研究から世界宗教研究所はたくさん重要なことを学んできた。中国の学者は口を揃えて先生の学問業績を誉め称えている」と最大級の賛辞を贈り、「先生が日中友好のために新たな貢献をなさることを信じている」と結んだ。

以上、長々と引用させて頂いたが、この記事の要点は、中外日報社並びに中国社会科学院世界宗教研究所の共催による日中仏教学術会議が二年おきに北京と京都に於て開かれ、すでに昨年第六回の会議が行われたということは十年の密接な日中交流があったことを意味する。昔の十年とちがって現代の十年は昔の百年にも相当するかもしれない。日中の文化交流や学術



交流はその長い年月の継続と積み重ねがあつて始めて信頼関係が生まれるといつてよい。だからこそ、その学術会議の開催のために労力と資金をつぎこまれた本間昭之助中外日報社長に対して、この十年の節目にあたって、世界宗教学研究所の名誉顧問の榮譽称号が授与されたのである。日中学術交流は、あらゆる障害を排除して継続することが一番大切なことなのである。

次に、私の蔵書をすべて私の死後、中国科学院文献情報センターに寄贈する件である。数年前、中国社会科学院世界宗教研究所の楊曾文教授が東京に來られた時、私の図書室に立ち寄られて蔵書を見て頂いたことがあり、その時、蔵書の寄贈と、それを明記した遺言の一部をコピーして差し上げたのであった。それをその後、種々検討した結果、中国社会科学院文献情報センターが受け入れを決定し、この度の授与式となったのである。

日中仏教學術交流と 善光寺留学僧育英会

最後に今後の課題について述べておきたい。中外日報との共催による日中仏教學術会議は今後十年間もまた継続することを本間昭之助社長は明言しておられるので、引き続き実施されると思う。中国の研究所、大学に所属している仏教研究者の数は著しく増加し、また若手の優秀な研究者の養成も目覚ましい。昨年の北京の学術会議の時には若い学者の質問が非常に多く、しかもその内容は極めて程度の高いものであり、中国の仏教研究の水準が高いレベルに達しつつあることを実感することができた。

日中仏教學術交流は、京都の仏教大学と中国仏教協会との間においても行われており、その他、鳩摩羅什生誕一千六百年記念学会、玄奘学会、法門寺討論会、禅関係の学術交流会など多

くの仏教関係の学会が開催されており、日本からも多くの研究者が参加している。今後、さらに仏教関係の学術交流が推進されると思う。

中国の若い仏教研究者や篤学の青年僧は、日本の国立大学のインド哲学研究室や、宗立の仏教系大学に留学して仏教を学びたい意欲と情熱を持っている。しかし、日本留学に要する費用や奨学金を授与してくれる機関もないのが現状である。中国仏教協会などの組織から派遣される場合もあるが、それはごく少数である。希望者は沢山いるが留学できないというのが現実である。

このような実情の中にあつて、善光寺留学僧育英会の果す役割は大きい。中国の留学生に対して善光寺留学僧育英会は従来からも留学費を供与して大きな貢献をされてきたが、今後また日中仏教交流という視点からさらに継続発展されることを望んでやまない。

一人の留学僧の生活を援助することは、日本政府の援助によって敦煌に、石窟美術を保護するセンターが設立されたようなことに比較すれば微々たることも知れない。しかし、この小さな善意を積み重ねることによって、山をも移すことができることを銘記しなければならぬ。中国の有名な格言に「愚公山を移す」という言葉があるが、どんな困難にあつてもねばり強く努力を続ければ、必ず大きな目的を成就することができるものである。善光寺育英会の留学費で育つた有能な研究者たちの力が結集され、大きな日中仏教交流の力となることを私は信じて疑わない。真の中国との交流は持続することによつて信頼が得られる。

今の留学僧育英会の制度を長く継続され、交流の絆を育てられんことを重ねて願つてやまなものである。

(横浜善光寺留学僧育英会顧問)